

# ミステリ読書案内

2023. 7. 11 発行元

第496号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 昨年出た本の中から

昨年出版された本の中から4冊を紹介する。ちょっとずつ読む範囲を広げて、常連ではない作家の作品に注目していこうと努力しているのだが。私にとって「常連」の少し外側にいる作家たちという感覚で…。

### 森晶磨『探偵と家族』

昨年の9月に早川書房から出た本。森晶磨の『黒猫シリーズ』はそれなりに評価している。けれども、それ以外の作品は相性の悪さを感じてしまう。本書で言うと「探偵」の部分は良いのだが「家族」の部分が重荷になってしまふ。「新型コロナ以降の家族の姿」は余計な要素に思えてしまうのだ。

銀田探偵事務所。父・龍一は専業主夫になり、母・獅乃はペット専門の探偵。長女・風咲も長男・瞬矢も目的を見失いがち。そんなところへ5年前の小学生失踪事件の再調査の依頼が入る。家族の一人一人の思惑が一致しないまま、調査はなかなか進展しない。事件の組み立てそのものはよく考えられていると思うのだが…。

### 図書館が購入する本の量

この前本を読んでいたなら、「(音楽の)クラシックを聞く人は1%、百人に一人しかいない」という記述が出てきた。「う～ん、まあそうかもしれない…」と思いつつ、「ミステリを読む人の割合ってどのくらいなのだろうか」などと思ったりもする。「10人に1人いれば上出来」というのは甘い見方か？

今回取り上げた本は全部図書館から借りた。私のいる市の図書館では毎年新刊で出るミステリの3分

の1以上は購入しているような気がする。現在、新刊図書が一番の購入先は公立図書館の気がする。ベストセラーから、市民たった一人からリクエストのあった本まで幅広く買っている。個人の購入が少なくなるのは悲しいことだが…。

そして、図書館で本を借りて読むのは六十歳代、七十歳代の年齢層。働き盛りの人達や若い人たちに紙媒体の本が広がらないと駄目だな。忙しい人達・年齢層にも読書に取り組むお金と時間的な余裕を…。本の文化が消えないように…。

### 東川篤哉『スクイッド荘の殺人』

昨年4月に光文社から出た本。帯には「デビュー20周年記念作品『烏賊川市シリーズ』13年ぶりの長編」と書いてある。「スクイッド」は「烏賊=イカ」のこと。

鵜飼探偵事務所の鵜飼杜夫と戸村流平の元に身辺警護の依頼が入る。遊戯施設を運営している小峰三郎の元に脅迫状が届いたので、クリスマス期間に過ごすスクイッド荘と一緒に付いてきてほしいという。時ならぬ大雪となり、そこに着くと孤立状態に。そこででの惨劇は…。20年前に起きた死体バラバラ事件に関連した流れなのだが…。ユーモアミステリで、事件の流れから外れたやりとりの部分が多すぎる気もする。複雑に組み立てられており、本格ミステリとしての仕掛けも工夫されているのだが今ひとつテンポに乗り切れていない印象もある。

### 近藤史恵『シャルロットのアルバイト』

昨年2月に光文社から出た本。『シャルロットの憂鬱』に続くシリーズ第二弾。6編収録の短編集。シャルロットとは警察犬を早めに引退した七歳の雌のジャーマンシェパードのこと。池上浩輔・真澄夫妻の飼い犬になっている。訓練が行き届いているのでしっかりした行動をとれるのが素晴らしい。ふだんはのんびりした性格。表題作の『シャルロットのアルバイト』は近くの動物病院で幼い犬を慣れさせる訓練にアルバイトとして参加する話。犬を取り巻く人たちのさまざまな生活ぶりや考え方…。日常系、コージー系のふとした謎の解決は…？

### 香納諒一『ナイトシフト 新宿花園裏交番』

昨年の6月に祥伝社から出た本。『新宿花園裏交番・坂下巡查』に続くシリーズ第二弾。本書は正に「コロナ禍警察小説」とでも呼ぶべき内容。新型コロナによるパンデミック時における新宿の街の様子をミステリに仕上げた。

新宿歌舞伎町に隣接する交番に勤める坂下浩介と内藤章助はカラスが通りかかる人に襲いかかるとの訴えを聞いて現場に。緊急事態宣言により人出の消えた街ではカラスが勢いを増していた。カラスの巣を見ようとビルの屋上に上がってみるとそこには白骨死体が…。コロナ禍によって仕事を失った若者たち、休む暇もない病院関係者、仕事を休めない人達のために夜間も開いている保育園、閉店を狙って動き出す地上げ業者…。そして、ついには警察にもクラスターが発生し、事件捜査に取り掛かったばかりの刑事たちは全員自宅待機が命ぜられる。では誰が事件を担当するのか。近隣の署からかき集められたメンバーが、そして交番の署員が非常事態の捜査を展開していく。香納らしい手際の良さ。